

先週の金曜日から12月に入り、今日は降臨節第1主日です。明後日12月5日は、ルーテル教会で午前10時から「クリスマスの讃美歌を歌いましょう」という呼びかけが、市内の教会に案内されています。私は現在、宮崎市内の牧師会の連絡係になっています。8年目になりますので、カトリックの神父さんやプロテスタントの牧師さんたちと、いろんなかかわりができて、それぞれの伝統を学ぶことも多くなりました。

6年前、11月の第2月曜日、宮崎聖三一教会で、宮崎市内の牧師会がありました。宮崎では2か月に1回、牧師会があって、プロテスタントの教会、それも福音派の教会が多くて、集まる牧師さんも女性が半分以上なんです。だいたい10人位が集まって、会場になった教会の牧師が説教をし、もうひとり、誰かが証しと言うか、発題をして、自分の関心のあることを紹介するような集まりをしています。午前10時半頃から集まって説教と発題、食事を共にし、午後2時頃まで近況報告でした。ところが、3年前、新型コロナウイルスの流行があって、昼食はしないで、午前中、牧師の説教は短くして、近況報告が中心になりました。ですから、今は午前中で終わっていますが、6年前聖公会が会場だった時の話をします。

6年前、私が宮崎に来て初めて自分の教会が会場になりました。「今回は聖公会の教会での集まりなので、説教もいいが聖公会の紹介をするような話をしてほしい」、ということになりました。プロテスタントの教会は、神学的にはいろんな立場がありますが、礼拝の形はほぼ同じようなスタイルなので、それらとは違う聖公会の、他のプロテスタント教会の間で異なっている点をいくつか紹介するつもりで、説教したあと、それも話しました。

たとえば、礼拝などで使う聖書ですが、聖公会では、旧約と新約の他に、旧約聖書続編というのを読みます。また、洗礼と聖餐というふたつの sacrament をプロテスタントは聖礼典と言って認めています。私たちもそれを聖奠にしていますが、その他にも、堅信、聖職按手、聖婚、個人懺悔、病人の按手および塗油の5つを聖奠的諸式と言って、加えているのです。これら旧約聖書続編や聖奠的諸式を、カトリックは他のものと同じように価値あるものとしていますが、聖公会は、救いには必ずしもすべての人に必要なものではないが、大切なものとして、それなりの価値を与えている、という点があります。

そのような聖書や礼拝形式の違いの他に、聖歌について、ちょっと気づいたことがありました。

他の教派の讃美歌などを見ていると、同じ歌を別の季節に歌うものがあるのに気づきます。一番象徴的なのは、私たちが今日から始まる降臨節に歌う「もろびとこぞりて」という歌ですが、他の教派ではクリスマスになった時、初めて歌うんです。

おそらく、他の教派の人々や一般の日本人は、この歌を聞くと、クリスマスをイメージするのでしょう。私たちは、この歌をクリスマスよりも前に歌っています。まあクリスマスの時に歌ってはいけない、ということではありませんが、そのあたりの違いの話をしたと思います。

さて、それでは、みなさんは「降臨節は何のためにあるのか？その目的を問われたら、どのように答えますか？」

私は以前、聖公会新聞に、降臨節を過ごす意義みたいなことを書いたことがありました。一つは、イエス様が2000年前にユダヤのベツレヘムに生れた、ということをお祝いする準備。そしてもう一つは、世の終わりに最後の審判をするために来られることの準備、という風に考えていました。それで、どうしても、「その時を待つ」という、受け身の考え方ができあがっていました。聖公会では、「降臨節」という言葉を使っていますが、カトリックや他のプロテスタント教会は、「待降節」、「イエス様が降ってこられるのを待つ季節」という字を当てはめているのです。

最近の降臨節の説明をいろんな教区の教区報などで読んでみても、「待つ」ということを強調しているように思うのですが、これは違うんじゃないか、という疑問がずっと私にはありました。以前、ある牧師さんから、「他の教派では、待降節と言うけど、降臨節の方が、訳語としては正しい。」と言われたことがありました。

みなさんは、降臨節を英語ではどのように言うか、知っておられますか？「アドベント」と言います。これを辞書で引くと「ad（～へ）+vent（来る）」という言葉が組み合わさって「～へ（神が）来る」という意味らしくて、「来る」ことに強調があり、「来るのを待つ」みたいな、待つイメージはないのです。そのことの説明に、私たちが降臨節の歌として、なじみ深い聖歌の69番「もろびとこぞりて」という歌が面白いと思ったのです。

「もろびとこぞりて、迎えまつれ 久しく待ちにし  
主は来ませり 主は来ませり 主は 主は来ませり」  
おそらくアドベントの「～へ神様が来られる」という意味では、何度も出てくる「来ませり」が重要なんでしょう。（これ以上文法的なことは言いませんでしたが）

『これを文法的に説明すると

き：カ行変格活用動詞「く（来）」の連用形

ませ：サ行四段活用動詞「ます（坐）」の已然形

「ます」は尊敬を表す補助動詞です。

り：完了の助動詞「り」の終止形』（ここは説明しない）

「来ませり」の意味は「おいでになった」「いらっしゃった」ということです。

結局、聖公会は、降臨節に「久しく待っていた主イエスは、おいでになった。」「いらっしゃった。」と歌っている。一方、カトリックや他のプロテスタントは「待降節」という待つ季節を過ごして、25日になったので、「主は来ませり」と、クリスマスの歌として、「もろびとこぞりて」を歌っているんですね。

ですから、聖公会は「降臨節」を、待つ季節にする必要はない。この季節に、イエス様が私の所へ来てくださっていることを、先取りして、体験することが大切ではないか、ということだろうと思います。

もう10数年前に手に入れた、「ヴィア・ドロローサ(悲しみの道)」という45分のビデオがあります。もうビデオテープ古いので、最近はそれをDVDにコピーして見ているんですが、これには、現代のエルサレムのユダヤ人やクリスチャンたちの、救い主を待つ生活を取り上げています。ユダヤ人たちは、未だメシアは来ていない、いつの日にか来られるのを待っている。クリスチャンは、イエス様が2000年前に来られたのですが、また来られるのを待っている、というわけです。

そんな待つ生活について、このビデオの半ば(20分くらいのところ)で、ナレーターが意味深いことを語ります。

『メシアを待つ生活とは、メシアが来た時と同じ生活をするることである。』

ちょうど、他のキリスト教派は、クリスマスまで待ってもろびとこぞりてを、クリスマスになってから歌うのですが、聖公会は、もうクリスマスが来たような気持ちになって、先取りして喜びの歌を歌うということかもしれません。

今日の福音書は、イエス様が再び来られることを予告しておられる箇所です。そして、その時は、天使もイエス様ご自身も知らないで、父なる神様だけが知っておられる、というのです。

それなのに、私たちはその時を、目を覚まして待っていないさい、と難しことを言われます。3週間前の、花婿が来るのを、火をともして待っている女たちの話では、みんな眠ってしまいましたが、余分な油を用意した女たちは、眠っても大丈夫でした。それでは、今日の「目を覚ましていなさい」という教えに対する対策は何があるのでしょうか。

今日の福音書では、いつ帰って来るかわからない主人を待つ僕たち。特に門番が目目を覚ましていることの大切さを強調している所ですが、ここから連想するのは、私たちの心の隙間を狙って、ちょうど道路を運転中のドライバーがスピード違反をしているのを見つける警察官のようなイメージをもってしまいます。自分の欠点を指摘する、意地悪なイメージがあります。

しかし、本当はそうじゃない。私たちが待っているメシアは、私たちの大好きな、わたしたちを喜ばせてくれる方だ、と考えたらどうでしょうか。嬉しいお客がやって来るのだから、ウキウキ気分、もう盛り上がって楽しんでいる。そういう生活が、あのビデオのナレーターが言っていたことに通じると思うのです。

『メシアを待つ生活とは、メシアが来た時と同じ生活をするることである。』

そうすれば、私たちはいつメシアが来ても慌てることはない。私たちが聖餐式でパンとぶどう酒をいただいているのも、天国でいただくおいしいごちそうのつまみ食い、先取りと考えるように、世の終わりの準備をする私たちの降臨節も、「もう主はおいでになった」と喜んで過ごすこと、これが聖公会が降臨節に「もろびとこぞりて」を歌う意味だろうと思います。